

草木は語る城市の記憶 — 朱天心「古都」

星野 幸代

0. はじめに

2000年カンヌ映画祭で最優秀監督賞に輝いたのは、エドワード・ヤン監督「ヤンヤン 夏の思い出」であった。この映画に寄せてヤン監督は、20年前に初来日した時の思いを次のように語っている。

「ここには僕たちの少年時代が、そのままに残っている！」という、懐かしさにも似た感慨。これは僕や呉念真〔「ヤンヤン...」の主演俳優、脚本家〕の世代に特有の思いなのかもしれない。僕たちが子供のころ、台湾は日本的なもので満ち溢れていた。家屋、公園、樹木、水路、街を走る列車、踏切、郵便局、神社……。すべて日本人によって設計されていた。でも70年代を境に、台北市はそれらをことごとく壊し、売り払ってしまった。……そこに僕たちの思い出はない。僕たちの心を平和にしてくれるものはない。それで僕は、一人の中年男が東京出張に出ることで、過去を見つめ直し、心の平安を得るという物語を考えたんだ。〔『Premire』2001年2月号、アシェック婦人画報社〕

朱天心「古都」は、一人の中年女が京都旅行に出ることで、過去を見つめ直し、心の平安をしばし得るものの、故郷である台北に帰ると異邦人のような違和感に呆然とする物語である。

台湾が“記憶を喪失してしまった”というのは、今や台湾知識人の共通認識であると言っても過言ではなかろう¹⁾。「古都」を読むことは、四十年余生きてきた一女性の記憶をたどることであるとともに、台湾、特に台北という城市の消されかけた歴史をたどることでもある。従って、個人の五感に触発された記憶を解釈し、その背景にある多重の歴史を発掘するように読むことが要求される。これらは「古都」評の中でも一致した見解である²⁾。

「古都」において、ヒロインの五感、特に視覚・嗅覚にとらえられる様々な事物の中でも、殊に豊富なのは植物の描写である。それは時に南国の、時に日本の春、秋の、時には北米のイメージを広げる。しかしなじみのない植物が膨大に挿入されるために、それをイメージできない焦燥感がつのり、小説から脱落する読者もいるのではないか。それは作者の意図的な仕掛けとも言えようが。これに関して、清水賢一郎 2000 は次のように示唆している。

ソローや D・H・ロレンスの引用は、この小説の植物に関する描写が、自然を歴史性 = 文化 = 政治との複雑な連関として捉える視線を要請していることを示している³⁾。

本論は、「古都」に現れる膨大な植物群のうち印象的なものを指針とし、それらが関連する歴史・文化・政治を追うことを通して、「古都」の地層の一断面を考察しようとするものである。

なお、本論で引用する「古都」の邦訳は朱天心 2000 の清水賢一郎訳によっており、原文は朱天心 1999 による。邦訳に異論がある場合は注に示した。

1. “Ilha Formosa！” — 欧米諸国と台湾

「古都」に登場する草木は、はじめ京都、ついで台北周辺の思い出の地をたずね歩くヒロインの目にランダムに飛び込んでくる、或いは他の事物から連想されるものである。それらは各々ヒロインの記憶の一シーンを呼び覚ますとともに、台湾の歴史のひとこまを物語る。

独特の香気を放つ高麗芝が敷き詰められ、そのうえには南国的イメージの艶っぽい草花が植えられていた。例えばいろいろな色⁴⁾のスベリヒユやランタナ、毒のあるヒオウギにニチニチソウ、…〔邦訳 pp.21-22、原文 p.158〕

それからナツメヤシや台湾ナツメヤシもなくてはならない植物だ。そうでなければ三百年以上前にやって来た男たちが遠くから台湾ナツメヤシの生い茂った海岸を眺めながら「Ilha Formosa（麗しの島よ）！」と叫んだりするだろうか〔邦訳 pp.22-23、原文 pp.159-160〕。

“Ilha Formosa” とは 16 世紀中葉、ポルトガル人が商船で台湾沖を通った際、緑豊かな台湾を眺めて感嘆した言葉で、それ以降、欧州では「Formosa」が台湾の名称になったという。その後台湾に渡来したポルトガル人、オランダ人、スペイン人、日本人もまた、台湾の南国特有の緑を愛でた。上記の植物群は外

国人の異国情緒をかきたてるために「なくてはならない」土着の草木である。但し、鮮やかな黄紅色のランタナは“美ナルヨリ観賞トシテ栽培セラルサレド台湾ニ於イテハ往昔和蘭人ニモタラサレ今ハ野生ニ帰セリ”⁵⁾という。ヒロインが南国的イメージのグループに含めているランタナは、実はオランダ人にもたらされた。

アダンとハマボウの林を抜ければ、そこは海だ〔邦訳 p.25、原文 p.161〕。

と唱えながら、高校の制服姿でヒロインは群生するアダンとハマボウを走り抜けた。アダン（台湾名「林投」、原文同じ）はシマタコノキとも言われるように地上根を持つ灌木で、海岸地で防風・防砂用として植えられる。ハマボウは台湾名「菓葉（北中部）/ 塩水面頭果（南部）」であるが朱天心は大陸中国で使用される名「黄槿」と記す。これも同じく防砂林として全島に植生する。つまりアダンやハマボウが密生する向こう側には決まって海辺があるのだ。ヒロインが十七歳の自分に思いを馳せると、続いてアダンとハマボウにまつわる台湾の記憶が叙述される。

フランス軍は 800 名もの陸戦兵を沙崙から上陸させようと艦砲による援護射撃をおこなった。それに対し守備兵は臨時に沿岸に土砂で堤防式の要塞を築いてその上から迎撃。…果たせるかなフランス軍は、アダンとハマボウが鬱蒼と生い茂った密林の中に迷い込み、銃器や砲火の威力を發揮することもままならず、しかたなく抜き身をふるって白兵戦で守備兵とわたりあうほかなかったという〔邦訳 p.25、原文 p.162〕。

これは清仏戦争（1884～1885）の光景である。フランス軍は優勢な海軍により台湾海峡の制海権を握り、沿岸封鎖、二港を占領し、台北盆地へ一気に進撃する勢いであった。折しも疫病がフランス軍を襲い、また密生するアダンとハマボウにはばまれなかったら、台北はこのとき占領されていたかもしれない⁶⁾。

フランス軍が上陸を敢行した基隆の古戦場は、海水浴場としてにぎわってきた。88 年後、「古都」のヒロインら若者が集う浜辺には、1950 60 年代のティーン・アイドル Frankie Avalon⁷⁾ のヒット曲“Why”が流れている。

「古都」の終盤、1990 年代にも「何か汚らしいイメージ」⁸⁾で台湾の浜辺に自生するハマボウは、フランス軍ならぬヒロインが台湾に拒否されていることを暗示しているようだ。

〔台湾に秋が来た〕その証拠になるのは、通りの両側に並んだフウの樹だ。もっとも、それは黄色く色づくばかりで、紅葉することは絶対になかったけれど、...今世紀はじめに完成した勅使街道を歩いていくと、あなたたちはまるで今いる場所がニュー・イングランド十三州であるかのような幻想に包まれ、そのまましばらく歩いていくと、偶然の一致だろうけどそこはまさにアメリカ——米軍顧問団の宿舎だった。五十年代のハリウッド映画にでてくるような典型的な白壁に大きな窓、煙突に緑の芝生〔邦訳 pp.32-33、原文 p.165〕。

蒋介石が台湾に敗退した当初、米国は台湾に対して経済援助はするが、蒋介石への軍事的支援はしないという方針であった。しかし、1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、米国は軍事不干渉政策を翻して台湾防衛を声明、台湾海峡へ米国艦隊を出動させ、ついで台湾への軍事援助を開始した。翌年、米国は台湾当局間と相互安全保障条約を結び、軍事顧問団を台湾に派遣した。終戦以来の経済援助も一段と強化し、経済援助活動本部の分署を台北に設置した。米国の莫大な台湾援助は、戦略的要衝である台湾を中国共産党から隔離し、また対抗勢力として蒋介石政権を温存しておくための策であったが、その援助が実質的に台湾の財政に果たした役割は大きい⁹⁾。

高校生のヒロインは屈託なく米国のテレビドラマに共感し、米軍内の売店でなけなしの小遣いをはたき、紳士的な米軍兵士に好感を抱く。

なぜかこういったことも、民族主義とまったく無関係で済んでいた。〔邦訳 p.35、原文 p.166〕

常夏の台湾にかろうじて秋を感じさせたフウは台湾山間部に自生する。しかし勅使街道の並木は日本の植民地政府が台湾神社への参道として整備したものであったため、90年代までにはほとんど切り倒されてしまい、ヒロインは哀惜の念を抱く。

ところで勅使街道の並木を「古都」はマンサク科のフウとするが、又吉盛清1996はマメ科の相思樹とする¹⁰⁾。外見が全く異なる二種であるのになぜ二説あるのか、筆者は未調査である。

2. “嗚呼台湾よ桜を生め” — 日本植民統治時代

彼ら〔日本人〕は北杉山¹¹⁾を樹でいっぱいにするだけでなく、この南の島にも、至るところに植物を植えようと努力した〔邦訳 p.57、原文 p.181〕

なぜか彼らは、絞れるだけ絞ったらあとはおさらば、というようなつもりはなかったらしい〔邦訳 p.58、原文 p.181〕

日本の台湾統治も一応軌道に乗った 1910（明治 43）年、総督府は長期的な展望をもって林野政策に着手した。

清朝時代、山林原野は原住民の勢力範囲にあり、平野にある森林も含めて測量などは行われたことがなく、課税対象ではなかった。台湾で初めて植物採集した外国人は、1854 年英国キュー植物園から派遣された Fortune であるといわれる。その後英、独、米の研究者が植物採集したことはあったが、日本統治の時代まで台湾植物研究に蓄積があるとはいいがたかった。

1895（明治 28）年「官有林野取締規則」により、「所有権を証明すべき地券、又はその他の確証なき山林原野はすべて官有」とすることとなった。この施行に伴い、東京帝大が 1896 年に牧野富太郎らを派遣したのをはじめ、植物学者たちが山岳地帯に分け入って森林資源を調査し、林相図、樹木誌、植物図鑑を作るとともに、将来の開発計画に関する施政計画書にまとめたのである。これによって台湾の山林の 90 パーセントが官有地になった¹²⁾。

台湾の森林資源を日本のために利用するべく計画・実施された政策は、結果的に台湾の林業に貢献することとなった。というのは、植民地政府の造林事業重視政策のもとで、年間伐採面積は植林面積を越えないよう厳しく規定されていた。このため、日本が敗戦し台湾が民国政府に引き継がれた当時、台湾には計画的に育成された樹林が豊富であった。民国政府は植民地政府の施政計画書を受け継いだものの、外貨ほしさに森林を乱伐した。1991 年ようやく森林伐採が停止された¹³⁾。

林業政策とは別途に、いわば美的観点から日本人が台湾に植えたものには二つの傾向があった。一方は、第 1 節でも挙げたような日本人が南国情緒を味わうための植物である。

ビンロウは不可欠だった。およそ大正時代や昭和初期に建てられた小学校、郵便局、政府機関、教会といった場所は、いずれもビンロウが植えられ、あるいは少なくとも枝振りや風情の似通ったピロウやダイオウヤシ、ナツメヤシの

類が植えられていた〔邦訳 p.22、原文 p.159〕

かれら〔日本人〕は北勢湖で苦勞して焼かれたレンガや瓦を取り壊し、三線路を開き、この南の島ではどこでも見かけるカタン¹⁴⁾と南国ムードを代表するピンロウの樹を、百五十株（愛国西路に）と百株（信義路に）植えたのだ。〔邦訳 p.56、原文 p.180〕

三線路は、台湾で焼かれたレンガや瓦によって清朝時代に築かれた城壁を日本人が破壊し、その跡地に作った四つの道路であり、現在の愛国西路を含む。二列の緑地帯で三車線に分けたため、三線路と呼ばれた。“緑地帯には大王ヤシ、楓、ピンロー、カタン、くば、ガジマルの木々や、多くの花々が植えられた。日本人は、この三線道路のことを「グリーンガーデン」とも呼んで、自慢の種にした”¹⁵⁾。それが形づくる四角形のほぼ中央には台湾総督府が位置し、さらにその中に官庁街、主要公共施設が置かれ、三線路は日本の植民地支配のシンボルであった。

三線路内の台湾第一女子高校に学んだヒロインにとって、青春時代はそれらのカタン、ピンロウとともにある。二十年後、彼女は移植されて見る影も無くなった並木をわざわざ見に行く。

どうしてもあきらめきれなかった。十六、七歳の頃の幾つもの夜、あなたたちをかばうように包み込み、数え切れぬほどの馬鹿げた話に耳を傾けながらも盗み笑い一つしなかったあの老カタンたちに一目会いたかったのだ。もしもあの老木たちがまだ健在であるなら、多くのものがまだ残っていていいはずだ。……まるで年老いた傷病兵のような老木たちの姿があなたの眼に飛び込んできた。……その変わり果てた姿はあたかもあの紅樓の、センダンの木陰に腰を降ろしていた白い骸骨を思わせた〔邦訳 pp.134-135、原文 p.228〕。

台湾総督府など日本統治時代の主要建築物は、改修を重ねつつ今日なお使われているものも少なくはない。しかし日本人が造った銅像、石碑の類は軒並み破壊され、並木なども徐々に切り払われるか、移植された。植民地化された往時の面影を消したいというのは至極もったもな感情である。だがそれらの行為は、日本統治時代を知らずにその時代が遺した風物に慣れ親しんだ世代にとって、心のふるさとが根こそぎ破壊され、消滅することを意味した。

一方、日本人は台湾人を同化するにあたり、“山と民族の国民性が内地の山河草木の自然的感化に負ふ所の大なものありとせば台湾の自然的要素の欠陥に

対して島民同化上憂国の至情より深甚の考慮を払ふべきものあるを痛感せざるを得ず”¹⁶⁾、さらに台湾で育つ日本人子女の精神衛生を考慮して、日本の風景を台湾に移植しようとした。

時にはおよそ花を咲かせる見込みのないシャクヤクや牡丹も試しに植えられていたし、それから同じくいささか無理があったけれど南洋杉や羅漢松¹⁷⁾も植えられていた。こうした温帯の植物が白塗りの壁やコールタールを塗った杉材の駅舎によって色鮮やかに引き立てられると、故国を懐かしむ幾多の入植者たちもそれで心慰められたに違いない〔邦訳 pp.21-22、原文 pp.158-159〕

牡丹は中国西部原産、日本では新潟、島根が主産地であることからもうかがわれるように耐寒性がある代わり過湿を嫌う。シャクヤクも暖地をきらい、日本では東京以北が適している。台湾では「およそ花を咲かせる見込みのない」のである。

1894年、地理学者・志賀直昂の『日本風景論』が刊行され、日清戦争の進行とともに人気を呼び、ベストセラーとなったという¹⁸⁾。その「松柏科植物」に次のように述べる。

蓋し松柏科植物の日本國中到る処に存在する、是れ日本国民の氣象を涵養するに足るもの……断崖絶壁、石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬着し、幹や、枝や、葉や、四時能く風、雨、霜、氷、雪に禦敵し、他の生平艶を競ひ媚を呈せる軟弱の植物は枯死し尽くすも、独り堅執して生存し、会々斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然斃るる所、他の花木の企つ所にあらず、真に日本人の性情中の一標準となすに足れり¹⁹⁾。

台湾にも中央山脈には少なからぬ松柏科の植物が自生するが、台北の市街地に積極的に松、杉、槇などを日本人が植えたのは、松柏科植物が日本国民精神を育むに値するという志賀直昂の主張に影響されたのではなからうか。志賀直昂は、1899（明治32）年10月28日台湾を視察に訪れているのである²⁰⁾。

同様の理由で、彼ら〔日本人〕はかつて戦時中に一万株の櫻の植樹運動を起こしたことがあった。この島〔台湾〕の人間にも彼らと同じようにあの花特有の、凄烈なる散り際の美学を愛してほしいと願ったのことで、こうして草山や霧社、南方澳に大量の吉野桜、大島桜、緋寒桜が植えられたのであった。この駅もご多分に漏れず一株の緋寒桜が植わっていたけれど、旧正月の前後に駆け足で一週間ほど花を咲かせる以外は、ふだんは青白く震えながら自信なげに、

船のマストのようなピンロウの樹の下に縮こまっていた〔邦訳 p.22、原文 p.159〕。

伊豆七島に自生する大島桜は白色でやや大きく、関東以西の暖地に植栽される緋寒桜は半開の濃緋紅色の花が下垂して咲く。いずれも「花見」で連想される薄紅色の桜のイメージとは異なる。暖地に比較的適応するので選ばれたものであろうが、一般に桜の植栽に過湿地は適さない。

それでも日本人は“朝日に匂ふ櫻花が我が国民精神を養ふに偉大なる力あり”という信念のもと台湾に桜を次々と植え、“嗚呼台湾よ桜を生め”²¹⁾と願った。台湾における日本人による大がかりな桜の植樹は、台湾経世新報社編 1992 によれば次の通りである。

- | | |
|--------------------|--|
| 1909 (明治 42) 年 2 月 | 台湾神社神苑に梅桃桜など六百余株を内地より移植す |
| 1931 (昭和 6) 年 3 月 | 台北桜花園 督府旧庁舎跡に開園式挙行 |
| 1934 (昭和 9) 年 11 月 | 日月潭湖畔に霧社桜 電力工事記念千本 |
| | 12 月 五指山に吉野桜 台北州汐止街にて二千本栽植
登山路を改修し花の名所となさんとす。 |
| 1937 (昭和 12) 年 1 月 | 台中州国立公園協会 東埔、八通関付近に吉野桜を大量移植 |

斉藤正二 1980 によれば、サクラの散り際のいさぎよさ、華々しさを日本人精神の象徴とする普遍的観念の歴史は意外に浅く、日本が国粹主義イデオロギーに染まった 1930 年代末から 1940 年代前半にかけてである。台湾経世新報社編 1992 は特に大規模な植樹行事しか記録していないと思われるが、これを見る限りでは斉藤正二の説にほぼ符合している。

「古都」で“吉野櫻”の名称が用いられているのは興味深い。ヨシノザクラとはこの種が売り出された明治初年当時の呼び名であり、奈良県吉野山のヤマザクラと混同されやすいため、後に改称された。今日のソメイヨシノである²²⁾。台湾経世新報社編 1992 が“吉野櫻”を用いていることから戦中はまだこちらの方が通称であったらしい。それが今も台湾では使われ続けている。

3. 錯綜する植生

台北の個人宅の庭はその主人を、あるいはもとの主人の出自を物語るものとなっている。

戦死も行方不明も免れた家の主人が、終戦で復員してきた最初の年に植えた巨大なパンヤノキ²³⁾が生えていた。あるいはまた……同じく南洋から帰ってきたにもかかわらずブルメリアを選んだ泰安街三番二号の一のような例もあった。……トウオガタマとマンゴーが顔をのぞかせており、あなたの外祖父の家によく似ていた〔邦訳 p.66、原文 p.186〕。

日本政府により徴兵され中国大陸、フィリピン、インドネシア、ニューギニア等へ送られた台湾人は 277183 人、公的な調査の限りでも 30304 人が戦死したと言われている²⁴⁾。意外なことに、南洋から復員した人々は、自宅に南洋植物を好んで植えたという。

なかには居住者がもとの姿をきちんと残そうとしている家もある。……庭の植物まで厳格にもとの状態を維持し、桜と羅漢松と南洋杉しか植えず、小鳥たちがあちこち種をまき散らすアコウやマグワ、シマグワがはびこらないように気をつけていた〔邦訳 p.67、原文 p.186〕。

「もとの姿」とは、桜と羅漢松と南洋杉が植えられていることから、恐らく日本人が造った庭の状況をさすのであろう。アコウは烏榕、雀榕と呼ばれるように、鳥が運んだ種子や挿し木で容易に繁殖するも、なぜかは不明だが“本島人は庭樹としてこれを忌むの風あり”²⁵⁾という。したがって現在の“居住者”は本省人²⁶⁾なのであろう。

庭に植えられた手入れの行き届いたクチナシやザボン、ビワ、ナンキンハゼからすると、これらの花樹を植えた御人は恐らく外省系の人かキツネであろう〔邦訳 p.65、原文 p.185〕。

ナンキンハゼは台湾名「拱仔」、大陸名「烏臼木」、原文「烏柏」は大陸名に由来すると思われる。“支那の原産と称し、清国時代に移植を奨励せる結果、帰化自生状を為すに至れるものならむ”²⁷⁾という。クチナシ、ザボンについて筆者は未調査だが、ビワは台湾に自生するものが多種あること、また上述のナンキンハゼの経緯から考えれば、この庭は外省人が渡来するより古い可能性があるのではなかろうか。

以上の知識によれば、次の一節は〔 〕内のように解釈できよう。

秋を知らせるのは決して〔中国的な〕菊とかモクセイではなく（あなたの父

親が外省人ならば) [植えてあるだろうが]、芙蓉とか樹蘭ではなく (あなたの父親が本省人ならば)²⁸⁾、[日本人が好む] シナフジや羅漢松ではなく (あなたの祖先が植民地時代に日本語常用家庭として表彰されていたならば [植えてあるだろうが]、ユーカリやパンヤノキでもないはずだ (あなたの祖先がかつて皇軍を代表して南洋諸島やオーストラリアにまで出征したことがあるならば [南国を思わせるものを植えてあるだろうが])) [邦訳 p.32、原文 p.165]。

これまで挙げてきたように、朱天心は意識的にか無意識的にか、ヒロインの植物名の認識に、台湾での名称と大陸中国での名称とを混在させている。それはヒロインの血に流れる歴史——母方の祖父は日本統治下で教育され出征し復員した日本最良の本省人だが、父親は 1949 年に渡台した外省人で日本嫌い——を物語っていよう。

4. 結び

「古都」のヒロインの記憶は時空を飛び越えて連結し、飛躍するが、それは単なる混沌や混乱ではなく、ヒロインの愛着による秩序を持っている。ヒロインの記憶の中で、少女時代、青春時代、また妻、小学生の母親となるまで、存在していた自分を保証するものは全て愛惜すべきものである。それが台湾に自生するものであろうと、植民統治者が植えたものであろうと、祖父が植えたものであろうと、嵯峨野の杉であらうと、建築物、道路、橋などあらゆる風物を含めて。さらにこの感慨は、冒頭のエドワード・ヤンの言葉に重なる、ある世代に共通の思いである。

台湾は、新たな台湾意識という地表の下に、オランダ・スペイン・清・日本による統治、国民党の統治と本省人との軋轢といった地層を重ねてきた。「古都」はあたかもソローが木の年輪を読むように、様々な草木にまつわる記憶を継ぎ合わせることにより、総体的な台湾の歴史を描く。すなわち、統治者が意図的に一部の事実を抹殺した歴史ではなく、都市に刻まれた記憶の集大成としての真の記憶・歴史を示すのである²⁹⁾。

ヒロインは台湾に好ましい場所を探し求め、ついに見つからず立ち尽くして泣く。この喪失感に満ちたシーンで「古都」は終わる。「古都」は、崩壊しつくす寸前の歴史の地層の一断面を示すことにより、多くの台湾人が台湾において根を下ろすべき場所を失おうとしていると警告しているのではなかろうか

³⁰⁾。

しかし結びの言葉“ 煌めく海よ、美しいの島よ、そはわが祖先聖王の運命のかかりしところなり ” には、ソローがいかなる人間の勝手な伐採、植林にあっても、森は自然の力で確実に成長の歴史をたどると確信していたように、負の遺産をも引き継いでいくことによって、台湾がいずれは最良の道にいたるといふ希望が託されている。

注

- 1) 朱天心「日出る処に致す書 — 日本語版刊行によせて」（朱天心 2000）に次のように述べる。“ もしも政治の強い介入によって、一つの都市どころか一つの時代までもが記憶喪失に陥るのだとしたら、かつてこの眼でそれを目撃し、記憶に留めてきた一人の人間として、わたしは決してそれを黙って見過ごすわけにはいかないのです”。同様に、殷允芄 1996p.16 に次のように詠じる。“ これら多くの栄光と哀しみの歴史が 煙絶えた蔓草の茂みに打ち棄てられたというなら 台湾は本当に記憶を喪失してしまったのだろうか”。殷允芄 1996 は原題『発現台湾』、はじめ 1991 年に雑誌『天下』の特集であったものを大好評のため単行本として出し、数年で 8 万 5 千部売れたという（丸山勝「訳者あとがき」、殷允芄 1996）。朱天心も恐らく殷允芄 1996 を踏まえているものと推測される
- 2) 朱天心自身、「日出る処に致す書 — 日本語版刊行によせて」（朱天心 2000）小説「古都」を“ 化石断層のような城跡を、一層また一層と見分けようとしたときのように ” あえて読者を混乱させるべく新旧様々な時代の地名を混在させるように書いたと述べている。王徳威「序論：老靈魂前世今生 — 朱天心的小説」（朱天心 1999）は「古都」について“ この小説で、朱天心はついに、彼女の歴史を呼び止め、時間を呼び戻そうという欲求を空間化している。歴史はもはや線で発展しない — 可逆性にせよ不可逆性にせよ、循環し或いは錯綜し、断層・塊状を呈した存在なのである。歴史は一種の地理となり、回想はまさに考古のようなものなのだ ” と評する。また清水賢一郎 2000 は次のように述べる。“ 主人公とともに私たち読者は、台北の街を彷徨いながら、都市の 記憶 としての歴史的地層を 時間 を行きつ戻りつしながら掘り起こしていくことになるのだ”。濱田麻矢 2001 にも同様の分析が見られる。
- 3) 清水賢一郎 2000、p.322。「古都」には多くの引用が、小説と脈絡はあるものの唐突に挿入される。ソローと D・H・ロレンスの引用は次の通り。“ 私が死ぬとき、あなたはたぶん、ホワイト・オークが私の心の心のページに焼き付いているこ

- とに気付くだろう。— ソロー ” (朱天心 2000、p.83)、“ 憎らしき緑、ジメジメした城市、総督はじっくりと齡を重ねて老境に入り、太古を見透す眼を具えていた。— D・H・ロレンス ” (朱天心 2000、p.18)。なお、自然に関する引用としてはこの他に、自然詩人口バート・フロストの言葉がある。“ 森のなかでは道が二手に岐れていた。私は人跡の少ないほうを選んだ。それが未来をまったく違ったものにした。— ロバート・フロスト ” (朱天心 2000、p.117)。
- 4) 原文“ 各種顔色の馬齒莧 ”。スベリヒユは黄色なので、“ 各種顔色 ” はスベリヒユだけではなくそのあとに続く様々な花の「それぞれの色」をさすと思われる。“ 馬齒莧 ” 自体が「いろいろな色」をしているとすれば、スベリヒユ科のマツバボタンであろうか。
 - 5) 伊藤武夫 1976 p.349。なお、本論の台湾植物に関する記述は、特記しない場合は伊藤武夫 1976、金平亮三 1973 による。
 - 6) 史明 1994、p.263-264。
 - 7) Frankie Avalon (米、1940~) は 1950 年代後半~1960 年代のティーン・アイドル御三家の一人。“ Why ” は 1959 年リリース。彼は今も実業家として健在である。
 - 8) 朱天心 2000、p.142。
 - 9) 史明 1994、第十七章「世界のなかの台湾」による。
 - 10) 又吉盛清 1996p.256。
 - 11) 原文も「北杉山」。本稿で引用した文の直前に、京都を舞台とする川端康成の小説「古都」より第四章「北山杉」の一説が挿入されている。それを受けて「北杉山」と書いているに違いないのだが、京都に「北杉山」の地名はない。「北山杉」とは京都の北山町で産する杉を指す。原文「北杉山」は同様の地名があるという朱天心の思い違い、もしくは「北山」の誤植ではなかるうか。
 - 12) 殷允芄 1996p.332、金平亮三 1973pp.1-2 による。
 - 13) 殷允芄 1996p.332。
 - 14) カタンは伊藤武夫 1973p.570 に「かたん」の項目を立て「一二あかぎト称シ全島ノ山野ニ多キ半落葉喬木」とするよう別名アカギ。小学館 1987 が「アカギ」に項目を立て、沖縄の天然記念物も「アカギ」と呼ばれることから、今日日本ではこちらの名で通っているらしい。原文「茄冬」の音は、「かたん」に近い。
 - 15) 又吉盛清 1996p.51。
 - 16) 本間善庫〔当時台東庁長〕「台湾島の櫻化を提唱す(上)」『理蕃の友』昭和 9 年 4 月号。
 - 17) 原文も「羅漢松」、台湾名は「百日青」。志賀重昂 1894 は「羅漢松」に「マキ」とルビをふる。『辞海』の「羅漢松」と学名 *Podocarpus macrophyllus* が一致することから、日本でのイヌマキ(犬楨)、あるいは変種の羅漢楨にあたるらしい。

- 18) 齊藤正二 1980pp.150-151。
- 19) 志賀重昂 1894。
- 20) 台湾経世新報社 1992p.36。
- 21) 本間善庫「台湾島の櫻化を提唱す(下)」『理蕃の友』昭和9年5月号。
- 22) 小学館 1987『日本大百科全書』「ソメイヨシノ」の項。
- 23) 「麵包樹」を清水賢一郎訳は「パンヤノキ」(パンヤ科)とするが、これは「パンノキ」(桑科)のことと思われる。「古都」にその実をスープに入れるというくだりがあるが〔邦訳 p.125、原文 p.222〕、パンノキの実は焼くか煮て食用にするのに対し、パンヤノキは種子が綿毛に包まれ、食用には適さない。
- 24) 林えいだい 2000p.9。
- 25) 金平亮三 1973p.165。
- 26) 台湾人の中でも、日本が敗戦して以降大陸中国から台湾へ来た人々を「外省人」と呼び、それ以前に来た人々および山地原住民を「本省人」と呼ぶ。
- 27) 伊藤武夫 1976 p.503。金平亮三 1973p.358 にも同内容がある。
- 28) 芙蓉は中国原産であるが台湾にも広く植生している。「樹蘭」が未調査であるため、この一句の解釈を筆者は保留したい。
- 29) ソローの歴史観については、主として伊藤詔子 1998 第七章「『種子の拡散』とソローの歴史観」を参考にした。
- 30) ドゥルーズ=ガタリ 1994「6 一九四七年十一月二十八日 — いかにして器官なき身体を獲得するか」、特に pp.184-185 による。

参考文献

- 殷允芃 1996『台湾の歴史』丸山勝訳、藤原書店
- 伊藤詔子 1998『よみがえるソロー — ネイチャーライティングとアメリカ社会』柏書房
- 伊藤武夫 1976(国書刊行会大正15年初版の再版)『台湾植物図説・正巻』国書刊行会
- 金平亮三 1973(台湾総督府中央研究所大正6年初版の復刻版)『台湾樹木誌』井上書店
- 齊藤正二 1980『日本人とサクラ 新しい自然美を求めて』講談社
- 志賀直昂 1894『日本風景論』改造社
- 清水賢一郎 2000「記憶の書」(朱天心 2000、解説)

史明 1994 『台湾人四百年史』新泉社

朱天心 1999 『古都』 珍藏紀念版、麦田出版社

朱天心 2000、清水賢一郎訳 『古都』 国書刊行会

台湾経世新報社編 1992 (台湾経世新報社昭和 13 年発行第四版の復刻版) 『台湾大年表』 緑陰書房

ドゥルーズ = ガタリ 1994、宇野邦一ほか訳 『千のプラトー』 河出書房新社

濱田麻矢 2001 「あなた」の記憶と「まち」の歴史 『東方』 2001 年 2 月

林えいだい 2000 『台湾の大和魂』 東方出版

又吉盛清 1996 『台湾 近い昔の旅 植民地時代をガイドする』 凱風社